

令和4年度文教厚生常任委員会管外視察報告書

- 視察年月日 令和5年1月19日（水）～20日（金）
- 目的 本委員会が所管する事項に関する先進地の取組みの調査及び研修
- 視察先 1. 愛知県岡崎市（19日）
・校内フリースクール「F組」
・乙川ローラースポーツ場（現地視察）
2. 京都府南丹市（20日）
・子育て発達支援センター
- 視察者 東田委員長、橋本副委員長、
池田委員、川戸委員、富田委員、和田正幸委員
（随行）議会事務局議会総務課 藤田係長 以上7名

1. 愛知県岡崎市

視察日時：令和5年1月19日（木）午後1時30分～4時00分

【岡崎市の概要】

岡崎市は愛知県のほぼ中央に位置する。中核市、中枢中核都市に指定されている。隣接する豊田市と共に西三河地域の中心都市である。総人口（2022年2月1日）382,894人、面積387,20km²。徳川家康の誕生地であり、岡崎城や八丁味噌の産地として知られている。研究教育施設や史跡が多く、市の規模に比べて文教都市の色が濃い。現在は中京圏の属する名古屋市の衛星都市であり、昼夜間人口比率は93.9%と流入人口よりも流入人口が大きく上回っている。中京工業地帯に含まれ、三菱自動車工業やトヨタ自動車部品メーカーなどの自動車関連工業が集まる。

【視察内容】

(1) 校内フリースクール「F組」

愛知県岡崎市が長期欠席者や集団生活になじめない子どもに個別最適な学びの場を保障し、多様な教育機会を確保するために設置した校内フリースクールのこと。F組のFは、Fit（フィット）、Free（フリー）、Fun（ファン）、Future（フューチャー）の意味。

① 基本的な考え方

- ・生徒の登校を第一の目的とする。
- ・心の保健室として生徒の心の安定・回復を図る。
- ・登校の基本的なきまり。「いつ来ても、いつ帰ってもよい。活動したいことを、自分で決める。服装は自由とする。」
- ・F組職員以外の多くの職員が関わり、対応できるようにする。

- ・ F組としての時間割はなし。本人が自分で考えて活動を行う。
- ・ 日課は学校の日課に合わせる。

② 生徒の状況に対応した施設（校内にある施設の有効活用）

- ・ 友だちと落ち着いて関り合うことが出来る場所づくり
- ・ 集中でき、クールダウン出来る場所づくり
- ・ 選択幅を広げた活動を行う。
- ・ 施設人員を工夫して個や少人数に特化した活動を図る。
- ・ 連携した対応の工夫（家族・保護者・校内職員・医療機関・外部支援ボランティア）



【F組の教室】

③ F組の5つの特徴

- ・ 対応するのは生徒ではなく学校。学校に適応するための適応指導教室ではない
- ・ 通常学級と同じ、一つの学級として扱う
- ・ 多様性を受け入れられる、校内でも信頼の厚いエース級の教員を担任に置く
- ・ いつでも生徒たちを温かく迎える支援員を配置
- ・ 教室復帰ではなく社会的自立を目指す

F組は、今までの適応指導教室とは違った「ヒト・モノ・コト」を設置することで、子どもたちにとって学校に新しい居場所になっている。またエース級の担任と支援員を中心とした支援体制の構築、校内で生徒がリラックスして過ごせる空間づくりを行うなど、多様な学びの場の保障や、社会的な自立に向けて支援、生徒個々の希望に寄り添う取り組みがされている。

F組は、福岡中学校にはじまり、その後、甲山中学校と矢作中学校の3校、2021年度には3校で開設。今年度には6校で開設され、岡崎市立中の全20校のうちの14校、7割の中学校でF組開設の整備が進められた。2023年度中に岡崎市立中の全20校での展開を目標に掲げている。



【担任教員等から説明を受ける】



【教室横からも登校できる】

【質疑応答】

<設置の背景について>

問 どういう経過で設置に至ったのか。

答 適応指導教室の発展的な解消という教育長の政策的な判断があったが、子ども達にとつ

てよりよいものを提供していこう。どれだけ子どもに寄り添っていくかという本質的なところを大事にという考えから始まっている。パイロット校として開始。その成果を徐々に市内中学校に手あげ方式で拡げていくもので各学校にあったやり方でむしろボトムアップで作りをあげてきている。来年度市内 14 の中学校全校に設置予定。校外には「ハートピア」というフリースクール（小中とも受け入れる）併用可能。

問 設立の理念について

答 社会的自立を目指す。通常級との段差をなくす。F組の中で培った自己肯定感や子どもの表情エネルギーをみて、通常級の先生や生徒に拡げていくこと。F組を核として魅力ある教員集団を作っていく事がよりよい学校を作っていく事につながる。「学級という箱を設置するだけでない。学校に子どもを適応させるのではなく、子どもに学校を適応させる」という思いでやってきた。

<予算や、人的な配置、基準は>

問 指導体制はどうか。加配はないか。

答 年度初めの予算のみ（30万円）で充足している。必要な備品などとのえる。学校の中の教員定数の中でやっている。学籍簿は通常級の中にある。担当は担任 1、支援員 1（校長 OB）、教員補助員 3《3名のうち 1 名が交替して勤務。F組だけでなく学校全体の補助員、各校に配置》支援員は 1 日 5h、週 5 日勤務の市の会計年度任用職員。その分の予算措置がされている。

問 支援員の確保がしにくい状況はないか

答 確保は大変。フリースクール支援員は最重要課題の肝になる。資格は必要ない。お互い情報交換して高め合っている

問 担任の決定はどのようにされるか

答 不登校の子にかかわる負担感は分け合えていると考える。支援員が家庭との連携をとるなどして助けていただいているのでその分の負担は軽減される（家庭連絡や家庭訪問、面談など）。

問 F組に入る基準のようなものはあるか。また元のクラスに戻る基準は。

答 不登校（気味）、長期欠席の生徒を対象にしている。非行の生徒は矢作中にはいないが、非行などの生徒はまた別の制度の中で対応して行く。何らかの不安を抱えている生徒に接する中で「F組がいいのでは？」と判断した場合は声をかけていく。

保護者会でもはじめは「元の学級にもどる」意識が強かったが、確実に F組で成長している様子が見て取れることで「このまま F組で」という声も聞かれた。学校全体で関わっていくという点で「どちらのクラスで」という選択は生徒がしていくものであると考えている。

<生徒の状況にかかわって>

問 他の生徒の対応はどうか。

答 「F組だから・・・」という気持ちはないと思う。F組の中では先輩たちが優しく接してくれる。年度初め始業式の時に校長から「心が疲れたら心の保健室としてF組というものがある」と説明。ほかとおんなじクラスとして扱うので何かあればF組としてエンターする等の機会も持って生徒理解を深めている。

問 27人の生徒の中でF組のみに来ている生徒もいるか。

答 常に流動的で平均16人が通っている。学年で何か行事など有れば戻る子もいる。行き来している生徒もいるし、3学期になって一度も来ない子もいる。全欠の生徒もいる《ハートピアにもいけていない》。

問 F組に関わった生徒の進路先は。

答 ほとんどが進学。昼間定時制が比較的多い。サポート校、通信制の高校など。生徒の行きたいところなりたいものの実現にむけてサポートしていく。F組に来た子はほとんど進学している。

問 通知表や、進路の内申などの扱いは。

答 活動内容を文章表現で、できるようになったこと等伝えるものと、各教科の観点なども見ていく通常学級と同じ通知表も出る。テストなど受ければ同じように観点別評価できる部分はしていく。「F組だから全部1」ということはない。進学補習もする。卒業式は通常学級の中で呼名もされる形である。参加できない生徒もいて午後から登校して証書だけもらうなどの対応もある。

問 部活動は。

答 部活動に参加できる生徒もいる。逆に部活に参加したいがなかなか教室には入りにくい生徒もF組に来ることで部活にも参加しやすい例もある。F組担任も他の教員と同じく部活の担当もしている。

問 親への連絡は

答 いろいろな機会に連絡を取り合っている。電話、送り迎えの時など。

問 F組から完全にもどった生徒は

答 戻った生徒もいる。

問 F組の生徒に対して接するときには大事にすることは。

答 肩肘張ってではなく、自然体で、心ひらきやすい存在でありたいと思っている。

<今後の課題など>

問 今の課題や将来的な展望について

答 F組に来て元気になってきた。学級復帰を目指しているのではないけれどその後の可能性や自己決断を促すためにどうアプローチしていくのか？どう支援していくか。日々悩んでいる。支援員や保護者と一緒に支えたい。F組にとどまる生徒が多くなれば体制面で課題も出てくる。

問 小学校への配置は。

答 現状は小学校には設置がない。大規模な小学校でも導入を考えている。別室の形で担任がおけるならやってみようという形で取り組む学校が出てきている。教員の意識改革で、暖かい学校教育が求められている。そんな発信が求められている。

【所見】

○校内フリースクールF組は、不登校の生徒をエース級の担任と支援員を中心に、生徒のために生徒目線で行っている。F組を守り育てるために、教育委員会と学校・全生徒が、F組を大きな気持ちを持って見守っている。京丹後市でも、多様性を受け入れられる、校内でも信頼の厚いエース級の教員の元で、不登校の子ども達にとって、居心地の良い居場所を造るべきだと考える。

○F組は「自分に合うことを」「自由に」「楽しく」「将来に向けて」をモットーに、学校の中での生徒の居場所となっている。子どもたちが学校から離れるのではなく、学校に通える居場所をつくることで対応している。岡崎市の教育方針を掲げ、教育委員会や学校教職員が研究し運営している。京丹後市にもF組があれば良いが、実現は難しいと考える。生徒数700人の大規模校（1学年8クラス、2学年5クラス、3学年7クラス）だから出来ることで、また教職員の意識改革を図ることで多くの教職員が支えて運営する仕組みができています。学校から離れないように子どもたちや親とどう関わるか、また校舎内で居場所が確保出来ないならば校舎外で安心して通える居場所（例えば：麦わらなどの施設）をどう作るかを考える必要がある。

○説明の中で印象的だったのは、「子どもが学校に合わせるのではなく、学校が子どもに合わせる」「フリースクールは子どもが心のエネルギーを充電する場所」という言葉だ。フリースクールの教室を見学させていただいたが、それぞれ子どもたちが興味のあることに取り組み、フリースクールが子ども達の貴重な居場所になっていることがわかった。一方で懸念点として、フリースクールの教員配置の難しさがある。フリースクールの担任は教員定数に含まれず、校内の教員でやりくりしなければならない。特に京丹後市のような小規模校で、更には教員不足である現状の中、岡崎市と同じ形式でのフリースクールを設けることは現時点では不可能であると感じた。フリースクールの取り組みは、様々な事情が

ら通常級に通いにくい子どもの居場所になっていることから、ひきこもりや家庭にいつらい子どもへの居場所の選択肢を増やすため導入されるべきだと感じる。そのためにも大きなハードルとなっている教員配置について、フリースクールの担任が教員定数にプラスされて設置できるよう国レベルで取り組んでいただくことを求めたい。

- 「教室復帰を目的にしない。子どもに社会で生きる力を身につける場所」「心の保健室」
「F組は学級という箱を設置するだけでない。魅力ある教職員集団を作り発信していく」
「学校に子どもを適応させるのではなく、子どもに学校を適応させる」今回の視察で心に残った言葉だ。F組を最重点課題として受け止め職員集団みんなの意識を改革して子ども達によりよいものを提供していく。まさに「困難を抱えた子どもを大事にする」このことが全ての子ども達を大事にするにつなげる教育の原点ともいえる。教室に入れないう子、学校に来られない子どもを「困った子」と捉えず、まず、その心に寄り添う。肩肘張らず、その子をまるごと受け入れる、そんな学級が公立の中学校で実現している様子を見て「京丹後の中学校でこの実践はどう生かされるか」考えた。京丹後市の中学校で教室に入りにくい生徒は別室で対応したり、保健室で対応したりすることが多い。別室は割と隔離された場所にあることが多く、ほかの生徒が出入りすることも少ない。中にいる生徒達も「教室に行けない」引け目を感じながら過ごすことが多いのではないかと想像する。別室指導は1時間ごとに、教科指導の空き時間を利用して空き教員が週程表に割り振られている。生徒にしても担当の先生の都合で時間割が限定されたりして、生徒の自由度は極めて小さい。今回視察した矢作中学校の「F組」とは違いがある。同じ仕組みでとはいかないまでも、「麦わら」と並列に、今の中学校の別室をより敷居の低い「心の保健室」として生徒に利用してもらおう仕組みは試行できるのではと思った。その際、専属の担任と支援員の配置は必要だと思う。F組のようなクラスができることで、子どもも保護者もそしてかわる教師もずいぶん負担や、困り感が軽減されるのではないか。学校全体の不登校生徒や登校しぶりなどが見られる生徒に対しての働きかけも、F組担任や指導員で担うことができ、学校全体で不登校生とのことを考えていくまさに教員集団の変革につながり、学校の中に好循環をもたらすのではないかと推測する。一足飛びには実現は難しいかもしれないが、教育委員会、学校、教員、保護者などまずは啓発、学習からのスタートになるが、比較的規模の大きい学校でのパイロット事業として取り組むことから始めることは不可能ではないと考える。京丹後流のF組の取組みが待たれる。

(2) 乙川ローラースポーツ場

【視察目的】

京丹後市では令和4年度当初予算に老朽化した丹後王国タワーを撤去し、跡地を活用した新たなスケートボードパークを整備するための検討会議や工事設計の予算が計上された。しかし、議会審査の中で「丹後王国タワーの撤去と跡地活用事業を同時におこなうことで有利な財源として合併特例債をすることは理解するが、本市観光における中核施設の一つである丹後王国『食のみやこ』の市の管理エリア活用については関連団体との十分な協議ができていない」との理由で減額修正し、いったんゼロベースで幅広く検討することとなった。

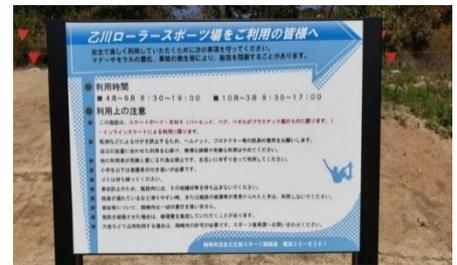
一方、市内でスケートボードを愛好する特に若年層からの練習場所の設置の要望は高まっており、署名も寄せられている。議会の一般質問のなかでも市は丹後王国への設置にとられず、ゼロベースで前向きに検討する方向を示している。

所管の委員会として、スケートボード施設を実際に視察することは「百聞は一見にしかず」今後の審査で参考にさせていただくことができると考えた。

【施設の概要】

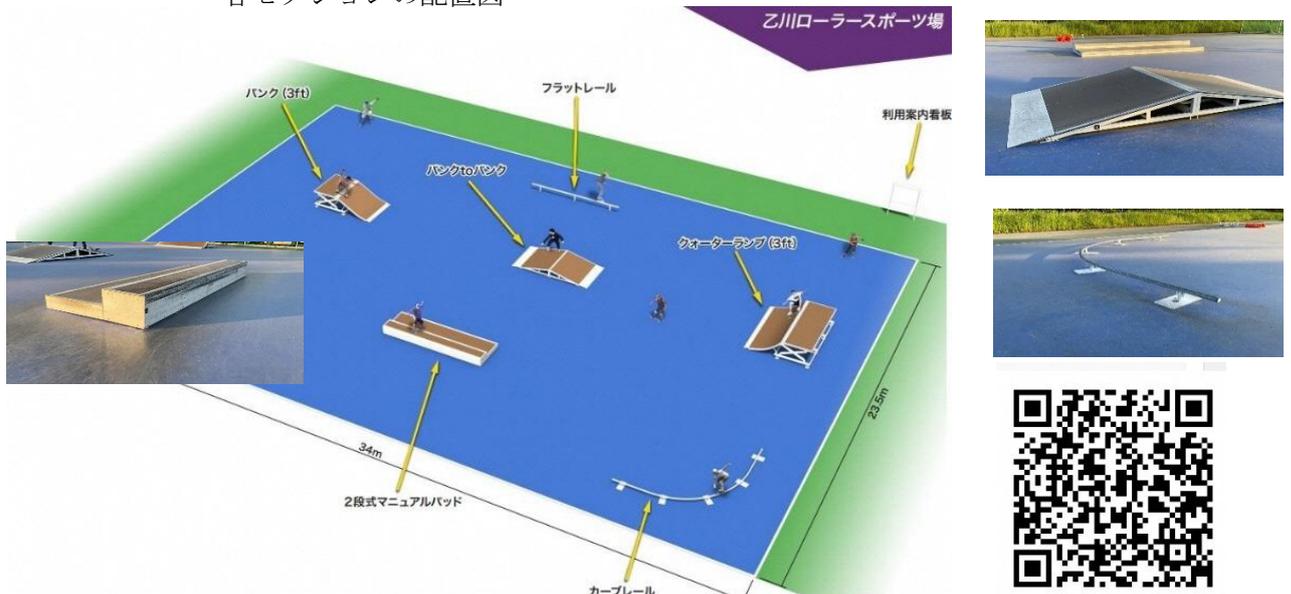
スケートボード、BMX、インラインスケート用で、クォーターランプ、バンク、フラットレールなど、ジャンプなどの技が練習できる設備として従前の河川緑地公園をリニューアルさせて市の施設として令和2年にオープン。

利用時間は8時30分から19時（10月～3月は17時）まで。利用は無料。駐車場、仮設トイレなどが設置されている。改修費は河川敷整備全体89,980,000円でそのうちローラースケート場は概ね3千万円で財源が一般会計。補助金などは活用していない。管理費は年2回の設備点検11万円。仮設トイレの清掃とくみ取り費用が4万円となっている。



利用案内の看板

各セクションの配置図



乙川ローラースケート場全景



日中管理人は配置せず、管理はスポーツ職員課で職員が設備点検を毎月実施し、半年に一度業者による点検を実施。課題としては近隣住民からの利用時間外の利用や騒音の苦情。施設へのゴミや吸い殻のポイ捨てなどがある。また、上級者が練習していると初級者はなかなか使いにくい。駐車スペースが少ない等の声も聞く。

【質疑応答】

設立の経過は



令和2年度に籠田公園や天下の道でスケートボードをされ対応に苦慮したことまた、コロナ禍でスケートボード愛好者が増加し、スケートボードを行う市民を誘導する場所が必要になった。「コロナ禍で子どもの遊び場が制限され、スケートボードに注目が集まっている」ことを理由に今までの河川緑地の舗装のみの施設のリニューアルを行った。

利用者、スポーツ団体、専門家などの意見はどのように集められ、若者の声はどのように反映されたか。



市内のスケートボード愛好家の中から中心人物となる、松金氏（プロスケーターでムラサキスポーツ所属）とコンタクトをとり、若者の声の集約とともに、ローラースポーツの組織「アクションスポーツアソシエーション」を立ち上げた。岡崎市のスポーツ協会にも加盟され、ローラースポーツの普及振興を図る組織ができた。整備にあたっては松金氏から種目、レイアウトなどのアドバイスを受けた。

新設する場合に
留意すべき点は



設置場所は騒音（しゃべり声、ローラー音）に配慮
車での来場が多く駐車場の確保が必要。施設ができる
と近隣市町からの来場も予想されるので面積や予算がある
ならば、初心者用と上級者用を分けて作るとよい。

【所見】

○気持ちのよい天気の中、若者、子どもなどスケートボードを楽しんでいる様子が印象的だった。京丹後市の若年層のスケートボード愛好者の声として「他市町にあるような、気兼ねなくスケボーを練習できる場所を設置してほしい」「練習していても『うるさい』『危ない』などと注意をされ、通報するぞと言われたこともあった」等の声とともにスケボー施設設置を望む署名も提出されている。「スポーツに親しむことは国民の基本的な権利」であり政治の責任としてスポーツに取り組める時間や経済的なゆとりを生み出す雇用の安定や労働時間短縮とともに、だれもが気軽楽しめる公共スポーツ施設の条件整備が必要と考える。東京オリンピックでスケートボードが公式種目として採用され、日本の10代20代の選手がメダルを獲得したこともスケートボード愛好者も増加してきている。

乙川ローラースケート場では、市内各地に点在して練習していたために器物の破損などが散見されたため、既存の河川緑地の舗装を直し一カ所に誘導するべく、リニューアル工事をされた例である。財源は一般財源。設置にはオリンピックでメダルを取った西矢椛が所属するムラサキスポーツのプロスケートボーダーである松金氏の助言のもとで、どんな設備にするか、配置なども検討された。その後松金氏を中心に設立された「岡崎スポーツアソシエーション」が市のスポーツ協会にも登録され、市のスポーツ振興の面でも大きく寄与している。

京丹後市内には練習できる施設がなく、よそに出かけて練習するか、既存の公園など舗装された空間を利用するしかなく、前述の苦情等と背中合わせに練習しているのが現実である。議会一般質問で設置についての9月議会で市長の考えは前向きであったが、その後の関係者や、競技団体、専門家などへのアプローチは全く進んでいない状況で、「令和5年度予算に調査などの費用の計上も含めこれから検討していきたい」（教育次長12月議会）との回答であった。市として答弁通りの早急な調査検討が必要だと考える。議会としても設置の可否、場所、規模、仕様、予算、配慮事項、メンテナンス管理など市民の要望の声を聞き、場合によっては府内にも類似の施設が有るので、設立までの過程や、コンセプトも含めさらに研究していくことができたならよりよい取組みになるのではと考える。

○乙川ローラーパークが設置された背景は、スケートボードによる近隣公園の器物破損がきっかけとのことであった。また、懸念される騒音や治安悪化については、看板での啓発や、元々が河川敷の広場であったことから、人が集まって賑やかであることは近隣住民か

ら理解があり、現在のローラーパークもトラブルなど問題なく運用されている現状である。無料開放している施設であり、利用者も多いが、河川敷であることから、増水時には撤去できるような設備であり、簡易トイレが一つと、パーク内の設備も簡易的なものであると感じた。本市ではスケボーパーク設置にむけた要望書が提出されるなど、要望の声が大きくなっていますが、設置目的や場所、運用方法、規模や設備については十分に検討が必要であると感じた。

2. 京都府南丹市

視察日時：令和5年1月20日（木）午後2時30分～4時00分

【南丹市の概要】

南丹市は京都府のほぼ中央に位置し、北は福井県と滋賀県、南は兵庫県と大阪府、西は綾部市、京丹波町、東は京都市、亀岡市に隣接するまち。緑豊かな自然に恵まれた地域で、北部を由良川、中南部を桂川が流れている。面積は、616.40km²。平成18年1月1日に園部町、八木町、日吉町、美山町が合併し「南丹市」となった。

南丹市は、るり溪、芦生原生林、美山川清流など自然資源に恵まれ、またスプリングスひよし、府民の森ひよしなどの日吉ダム周辺施設やかやぶき民家群など観光資源も多くある。大学も多く、学生のまちとしての特徴もある。

【視察内容】

(1) 南丹市発達支援センターについて

障がいのある児童や発達支援の必要が認められる児童に対する必要な指導、訓練及び相談

【質疑応答】

問 早期発見・早期支援で特に重点として取り組まれていることはどのようなことか。

答 心理士と作業療法士が乳幼児健診から関わることで全ての子どもに触れることができる。

問 保護者の受容の壁は早期発見により低くなっているか。

答 5歳児に支援ファイルを親に渡している。発達外来を紹介した際に受容の壁にあたる。小学校入学してからも繰り返し発達支援相談を受けられるので、引き続き会話しながら受容いただいている。他市町よりは受容いただいているのではと思う。

問 支援ファイルの使用率が低いことが京丹後市では問題となっているが、それに代わるような取り組みはあるのか。

答 支援移行シートを作り、療育施設や保育所幼稚園から学校へ引き継いでいる。支援移行シートはエクセルデータで書式が決まっており、保育所幼稚園の担任の先生が

記載する。支援学級や放課後デイサービスなど福祉支援を必要とする子どもに作成。支援ファイルは子どもや親が自己理解として使用するツールとして活用しており、支援ファイルを学校に預けることはない。

問 京丹後市では、にじいろノートの活用が進まないことが課題となっているが、南丹市の支援ファイルではどうか。

答 出来る限り親の記載する箇所は簡素化しており、必須ともしていない。母子手帳のコピーや、お便りをそのまま綴るなど、労力かけずに管理してほしいと伝えている。とりあえず記録を残すことが目的。前向きに管理いただいている。

問 全ての保護者や児童生徒に対し、発達障害の理解促進の取り組みはあるか。

答 加配の先生にスキルアップ研修を行っている。保育所幼稚園の保護者会で、0～1歳との遊び方や関わり方を作業療法士が教えている。

問 支援の切れ目になりやすい節目のフォローはどう工夫しているか。

答 発達相談やOT相談に繋がっている子どもが就園する際、保健医療課と保育所幼稚園の連携があり、そこに同席して相談内容や様子を伝えている。発達支援センターが療育園と併設されているので、いつでも連携できる状態。新1年生に対し、年度末に小学校の特別支援コーディネーターの先生と連携し、子どもの状態を伝える。

進級の際にも、保護者や先生からの依頼に応じて参観に行き、対象者の評価などしている。放課後児童クラブ、中学校、高校も同様に連携し、参観に行っている。高校卒業後の方には、医療施設への動向や、社会福祉課の相談員につなぐなど、連携している。

問 小学校から中学校への連携について、小学校は担任制だが中学校は教科担任制になり、教師の共通認識が持ちにくい場合が多い。特に学校規模が大きくなればなるほど顕著で、きちんとフォローができないままトラブルの原因や2次障害となることが多いと考えるが、その状況はどうカバーしているか。

答 発達支援センターへの相談の敷居が低く、そのような問題は起きにくい。学校の中だけでの解決方法や、地域と一緒に協力するなど難しいが、センターがあると支援できる。

問 中学校以降の支援について取り組みは。

答 センターの事業としてはやっていないが、学校や保護者、本人からの相談などケースがあれば対応している。保育所幼稚園を巡回しているので、保護者からの認知もされているので相談しやすい。

問 財源と内訳について。

答 令和3年度決算 発達支援センター管理運営費 4230万円。内訳として国府補助1190

万円。一般財源 3039 万円。園から療育施設への輸送サービスを市独自で展開しており、京都地域連携交付金 925 万円。心理士が園や学校へ出向いての巡回支援。地域生活支援事業補助金国庫 1/2。府 1/4。4，5 歳の発達障害児等早期療育支援事業費が府 1/2。建物管理や草刈り、光熱費は一般財源。

問 発達支援センターがあることによる効果メリットは。

答 乳幼児期から関わるので、相談が終了した子どもでも、就学後つまずいたりした時につながりやすい。専門職が地域に身近にいるので相談を受けるハードルが低い。医療や療育につながるまでの受け皿になっているので、必要となればスムーズにつなげやすい。保護者への子育てケアができる。保育士のスキルアップ。保護者や園学校の先生が困った時にセンターに相談できるため、担任の先生一人が抱え込まずに対応でき、地域全体で子どもを見守れること。

問 運営上の課題は。

答 保護者支援が必要なケースが増えている。発達以外の要因が重なって子どもがしんどい思いをしているケースがあり、家庭支援に伴走できるような方がいたらと思う。相談対応の専門職が大事と考える。

問 就職への関りはあるか。

答 14 年目なので、これからある可能性はある。社会福祉課の機関相談支援センターと連携する。

問 センターへの相談の敷居が低くなっているポイントは。

答 11 か月の乳幼児健診に作業療法士が入り、子どもの遊び方など教えたりしているので、全保護者と顔見知り。ちょっとした事でも相談しやすい環境ができている。

問 南丹市は広域だが、1カ所で十分か。

答 身近な相談場所で相談できるよう 4 町の保健センターを活用してこちらから出向いている。

問 保育所幼稚園への巡回の詳細は。

答 心理士、作業療法士、保健士がセットで巡回。朝 9 時～昼食後まで現地でみる。1 年かけて巡回。11 の園を 4 回～5 回まわる。

問 支援ファイルや移行シートの活用は必要な子どもについてしっかり記載され活用はできているか。

答 完璧に記載されているわけではないが、重要性を理解し、保護者や先生の意識が変わってきており活用されている。

問 保護者の障害受容について、障害福祉課という窓口に抵抗があると聞くが、南丹市はどうか。

答 療育体験を1回してもらっている。その後説明する。障害福祉係ではあるが、支援センターがしっかり説明して前向きに100%受容いただいている。

問 療育施設のつくし園の運用状況は。

答 週1回上限。63名登録。午前と午後で半日10人利用していただいている。最初5回は親と一緒に来てもらう。保護者の不安が強い場合は作業療法士など同行する。

問 つくし園の受入キャパは十分か。

答 予算的な問題もあり、本当に必要な4歳～5歳の子どもをメインにしている。入れない子どもはプレ療育「こぐまっ子教室」で対応している。

問 センター職員は足りているか。

答 正職員は保健師1名、作業療法士2名。会計年度任用職員は心理士1名。人数はほしいが、定員計画の兼ね合いで難しい。

問 どんなスキルアップ講座をしているのか。

答 保育士の加配先生への20本のスキルアップ研修を行っている。小学校先生やファミサポへも研修をしたり、要望があれば研修実施している。

問 京丹後市では小学校に入学するとどこに相談したら良いかわからないという声を聞くが、どのようにしているのか。

答 担任の先生がセンターを紹介してくれたりする。担任の先生も助かっている。

問 発達支援センターができた経緯は。

答 現場の保健師から声を上げた。療育の家族会から要望も出した。



【作業療法士による説明】



13 【旧保育所を利用したセンター】

【視察内容・所見】

○南丹市から学ぶ点が多くあった。大きくは次の5点。

① 連携とスタッフの充実

1箇所に療育センターと発達支援センターを設置して、連携を強化している。

南丹市の子育て発達支援センターは、開設し14年が経過する。発達支援相談事業を市役所保健医療課で、また児童発達支援事業「つくし園」を南丹市社会福祉協議会で、旧川辺小学校を活用して事業展開をしている。京丹後市においても、いつでも関わりが持てる近い場所での設置が必要と考える。

専門職の配置

スタッフも心理士、作業療法士、保健師、言語聴覚士、医師、保育士と確保し、充実した体制で対応し相談者も安心できる、またしっかりと対応できる構が必要と考える。

②地域に出向く姿勢

11園ある市立の子ども園を1年かけて巡回し、合併前の4町の保健センターを活用し、地域に出向いて早期発見、早期治療に心がけているとのこと。広い京丹後市内の対応となると6町の拠点も必要と考える。

③途切れることがない連携の強化

どこの市町も同じような仕組みはあるが、しっかりと連携し支援することがポイント

④気軽に相談できる仕組み

親はどこに相談したらよいのか分からない。困ったら障害者福祉課へでは繋がらない。子育て支援センターに集まる仕組みや仕掛けが必要である。そして、療育支援センターや発達支援センターの役割を保護者の方に理解していただくことが重要と考える。

⑤スタッフの知識や技術の向上を図る研修の開催

保育士や教職員への研修を年間20回ほど行い、知識や技術などの向上に努めているとのこと。多くのスタッフの養成も必要と考える。

○早期発見、早期支援が重要となる発達障害への支援について、本市の課題は、親の受容と小学校から中学校、高校へのにじいろノートを活用した情報引継ぎであると考え。その点、南丹市が取り組む子育て発達支援センターでは、11ヶ月検診から作業療法士が関わることで、保護者の受容の壁を低くし、更には保育所幼稚園や学校の先生への研修や、保護者と学校のつなぎ役となることでスムーズな発達支援につながっていることが分かりました。発達支援の観点や、教職員の労働環境改善などの視点においても発達支援センターの存在価値はとても大きく、子どもを中心に置き、幼児期から切れ目のない伴走支援となる取組であり、本市においても導入するべき事業であると強く感じました。

○3つのキーセンテンスがある。

- ・「作業療法士、心理士、保健師の専門職のチームで子どもの遊びを通じて全てのお母さん(お父さん)に何度も出会っていて、顔見知り」「療育の敷居を低く」

- ・ 「困ったらここ（発達支援センター）に言えば大丈夫」「相談と療育がセット」
- ・ 学童期への連携と支援の継続(支援ファイル、移行支援ノート)

南丹市の発達支援の取組みの素晴らしさは下の3点に代表されると考える。

① 「早期発見」→支援。これは誰も認識する理想的な形である。早くから支援の手が差し伸べられることで当事者の子ども本人はもとより、保護者、家族、保育にかかわる方の困り感が大きく軽減され、将来の展望も持てる。しかし、わかっているも保護者の受容に壁があるのも多くの事例の中では見受けられる。しかし、南丹市の場合は作業療法士、臨床心理士、保健師の専門職のチームで子どもの遊びを通じて全てのお母さん(お父さん)に子どもが小さい頃から何度も出会っていて、顔見知り。だから保護者も構えずに気軽にどんなことでも相談でき、スタッフとの関係性が構築されている。「何か発達に心配があれば相談しよう」「療育」と言うことへの敷居が低いのである。広い市域の保育施設をくまなく回って1年間で11施設に延べ41回の訪問と聞く。さらに小学校に進んだ子ども達への学校や放課後児童クラブなどへの訪問もされている。「療育」=障がいの軽減、克服と捉えるのではなく、子どもの笑顔や、「楽しかった。また来たい」の言葉に親も子も安心して前にすすめる温かい雰囲気印象的だ。療育の敷居が低い。

② お母さんの「発達支援センターにいったら、すごくよかったで」という口コミで、他のお母さんにも広がっていると聞く。OT（作業療法士）による体（ことば）の使い方アセスメントなど、センターに足をはこぶことのハードルを下げ、気軽に来ていただける雰囲気を作っている。

「スキルアップ講習」で日々の困り感など悩みを打ち明ける、保護者会に呼ばれて、「今大事な遊び」「ことばかけ」「ほめ方」など具体的な指導がなされて、参加した方が充実感を持って帰れる取組みがなされている。乳幼児期からのつながりで身近に利用でき、療育にスムーズにつながりやすい。園や学校も相談しやすい。いわば、困った時の発達支援センターなのである。ワンストップの強みだと感じた。

③ 支援ファイル、移行支援ノートでしっかり支援の継続をはかる取組みがなされている。支援ファイルは5歳児（就学前）の時点で今までの整理をし支援ファイルとして保護者が管理。節目の移行期には、「支援移行シート」で保護者が伝えたいこと（得意、不得意、親の願い等）を記入し、進学先の園、学校に保護者が渡す仕組みになっている。紙でもデータでもよい。細かい記述ができないときは保育園のお手紙を挟む等の簡易なものでもよく、ハードルが低い。保護者が渡すことで進学先も細かい点やニュアンスも共有できる点が効果的だと考える。保育園や小学校の教師、中学校、高校の教師の引き継ぎというやり方より、有効ではないか。

- ・ 南丹市の発達支援センターを視察して「スタッフの専門性を思い切り発揮し、チームで地元根付いて、アットホームなあたたかさ」に感動した。ひとりの子どもを作業療法士の目、心理士の目、保健師の目で多面的に捉え、みんな子どもさんが生まれたときからの顔見知りで、安心して相談ができる安心感があるのが、特徴的で、何かあればすぐに療育につなぐことができるところは学ぶべき点だと感じた。一つ一つの言葉が確かな理論に裏付

けされていることで保護者も納得できるなと感じた。※トランポリン一つとっても「トランポリンで遊ばせることでおなかの筋肉が伸び、それにもなって両手が上がってくるようになり、いろいろな作業につながる」と言われ、妙に納得したが、保護者も同じ感覚になるのだろう。

支援ファイルと移行シートの使い方も実態に合ったもので、移行シートを親が主体になって進学先に出す方法は有効だと感じた。

京丹後市は間口を広く、どこでも相談できるというスタンスだが、南丹市はワンストップで発達のこと、子育てのことは発達支援センターに！という仕組みになっている。結果、うまく先々につながっているように思えた。京丹後市の今までがんばって構築してきた発達支援の取組みをさらに充実発展させるために我々議会としてもさらに学びを深めていく必要を痛感した。

以上